

口腔先端科学教育研究センターの新設

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
口腔先端科学教育研究センター長

宮脇 正一

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科には、平成20年5月、医学系を主体とする「国際統合生命科学研究センター」、「先端のがん診断治療研究センター」とともに、歯学系が主体となる初めてのセンターとして「口腔先端科学教育研究センター」が設置されました。

口腔は、呼吸や食物摂取など生命維持に関わる重要な器官であるとともに、発音や表情の形成など社会生活に欠かせない多様な機能を担っています。超高齢化社会を迎えた本邦においては、疾病構造の変化や社会的ニーズの多様化が急速に進み、口腔機能維持のための歯科医療や保健指導等の手法の開発と、その基盤となる研究および教育の推進が求められています。

しかし、歯科を取り巻く状況は、歯科医師過剰状態の是正を目的とした歯学系大学の入学定員調整施策や、医科との統合に伴う人員および予算の縮減など厳しい立場に置かれ、教育・研究・臨床の全てにおいて、少なからず衰退していかざるを得ない状況に陥っています。

こうした状況を打開するために、全国の歯学部長による戦略会議により、全国の歯学部を有する国立大学を中心とした先端歯学ネットワークが提案され、平成15、16年に文部科学省からの予算措置を受け、準備を開始することになりました。そして、平成17、18年には、スーパースチューデント認定のためのネットワークスクールが計3回開催されました。平成19年にはこれを連携研究に発展させることを目標に新たに2,000万円の予算措置を受け、基幹校となっていた新潟大学を中心に準備が進められてきました。こうした実績に基づき、平成20年度からは、国立大学法人歯学部を中心に全国の大学が協力し、「口腔からQOL向上を目指す連携研究」事業に取り組むこととなり、各連携校に対して年間1,000万円の予算が今後5年間にわたって措置されることになりました。

本事業では、「口腔のQOL向上」をキーワードに共同研究を推進するとともに、大学院教育を高度化し

て卓越した能力をもつ人材を育成し、得られた知的あるいは人的財産を社会に還元することにより、国民の口腔機能の維持、回復を図ることを目的としています。また、全国の歯学系大学が保有する優れた研究や技術、業績、および人材を、ネットワークを通じて集約し、必要に応じレスポンスする歯学連携データベースを構築し運用することで、効率的な研究の推進を可能にし、もって第一線の教育研究者の集約的連携と分野間の融合、および国際的競争力の向上を図ることを目標としています。具体的には以下のような事業を計画しています。

1. 国際的に通用する卓越した能力を有する大学院生（以下、スーパースチューデント）の発掘・重点的育成のために、歯学ネットワークスクールを開催し、各大学で選抜された優秀な大学院学生に研究発表させ、将来の歯学研究を担うスーパースチューデントを選抜、認定する。
2. スーパースチューデントに認定された大学院生には研究費の支給、海外研究派遣を行い、ポスドクとして研究実績を積ませる。
3. 研究者間の競争的環境の醸成として、研究集会や研究討論会を開催し、日本の歯学研究のボトムアップを図る。
4. 歯学研究ネットワーク参加大学が保有する大型機器等の設備を全国共同利用可能な設備としてバーチャルラボデータベースを構築し、参加大学が効率的に利用できるようWeb上で公開する。

今後5年間のうち、まず第一期中期目標期間（平成20～21年度）においては、基礎研究の促進（Bench project）を中心に国際研究機関と連携した上で、国際シンポジウム開催により研究成果を国内外の有識者から中間評価を受ける予定になっています。第二期中間目標期間（平成22～24年度）では、中間評価の結果を基に応用・展開研究の促進（Bed side project）を中心

に第一期同様，国際研究機関と連携した上で，国際シンポジウムを開催し，国内外の有識者から最終評価を受けたいと考えています。さらに，最終評価の結果に基づき，その後の展望を含めて報告書を取りまとめ，口腔機能再建によるQOL向上のための研究のマニュアル化を促進するとともに，国際競争力を有する研究レベルに引き上げ，第一線の教育研究者の集約的連携促進，融合分野への新たな研究促進，国内外歯学教育研究ネットワーク推進，卓越した能力をもつ歯学研究者・歯科医療人の育成に寄与する予定になっています。

さて，当研究科が本事業に連携校として参加するに当たり，これまで歯学部主体のセンターがなく，歯学部の全分野が協力して新たな活動を行う場を設ける必要性が生じたことから，今回，医歯学総合研究科内に「口腔先端科学教育研究センター」が設置されることになりました。そして，本学の初代ネットワーク委員の和泉前鹿児島大学教授（現東京医科歯科大教授）がされていた業務を私が引き継いだ経緯から，私がセンター長を拝命することとなった次第です。何分，舵取り役を命ぜられた私自身が知恵も経験も少ない若輩者であるため，ご迷惑をお掛けすることも多いことと思いますが，運営委員，オブザーバーの先生方および関係各位の御指導御鞭撻を賜りながら進めていく所存ですので，何卒暖かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

以下に，本センターの目的，組織，および活動状況について記します。

目的

1. 研究の推進

- 1) 口腔からQOL向上を目指す連携研究事業の推進
- 2) 大学院生と若手研究者に対する研究支援と研究意欲の醸成
- 3) GPや概算要求等による教育研究拠点形成の推進

2. 教育の改善

- 1) 大学院生と若手研究者の教育と生活の支援
- 2) 大学院歯学研究科からの引継ぎ業務
- 3) 学部教育との連携強化

組織

- ・委員長：宮脇正一（歯科矯正学分野教授）
- ・副委員長：松口徹也（口腔生化学分野教授）
- ・教育改善委員：

原田秀逸（教育委員会委員長，口腔生理学分野教授）
佐藤友昭（教育委員会委員，歯科応用薬理学分野教授）

・研究推進委員：

口腔環境制御研究プログラム班：

小松澤均（口腔微生物学分野教授）

摂食・嚥下機構研究プログラム班：

山崎要一（小児歯科学分野教授）

再生工学研究プログラム班：

野口和行（歯周病学分野教授）

・オブザーバー：

杉原一正（研究科長，顎顔面疾患制御学分野教授）

植村正憲（歯学部長，歯科機能形態学分野教授）

仙波伊知郎（学長補佐，口腔病理解析学分野教授）

・GP申請に関するWG委員：

中村典史（口腔顎顔面外科学分野教授）

・委員長補佐：

福永智広（歯科矯正学分野講師）

永田順子（歯科矯正学分野助教）

・事務担当：大学院係，予算係

活動状況

先端歯学スクール2008報告

（報告者：稲田絵美，大学院3年）

平成20年10月20，21日の2日間に亘り，神奈川県三浦市で開催された先端歯学スクールに参加させていただきました。各大学の各分野で先端といわれている研究の発表を聞き，それに携わる諸先生方と研究に関するお話をすることで，現在の歯学研究の現状と将来展望，今後の課題などを知ることができました。さらに，現在の歯学研究における自己の研究の位置づけについて改めて考えさせられる2日間でした。今回の経験を今後の研究に反映させていきたいと考えております。

第1回歯系大学院生研究発表会（報告者：松口徹也）

平成21年1月31日（土）に，鹿児島大学大学院医歯学総合研究科口腔先端科学教育研究センター主催の歯系大学院生研究発表会が，鶴陵会館大ホールで開催された。本発表会は，口腔先端科学教育研究センターによる若手研究者助成事業の一環であり，研究内容の審査で認められた者について，表彰および研究助成金の給付を行うものである。今回が記念すべき第1回目の開催となった。

今研究発表会への応募資格者は，鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の歯系講座に所属する大学院生，特任研究員，および申請時37歳以下の科研費申請資格の

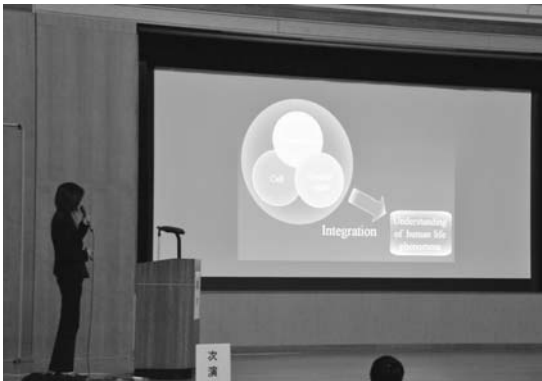
ない若手研究者に限られる。今年度は総計で47名の応募があり，そこから一次書類審査で選ばれた26名のうち，1名の辞退者を除いた25名が，パワーポイントを用いて，自分の研究成果，展望などについて熱弁をふるった。

発表会は午前の部（大学院生1～2年生）と午後の部（大学院生3～4年生）に分けられ，聴衆を含めた出席者の総計は149名に上る盛会となった。発表内容は高い研究レベルのものが多く，活発な質疑応答も交わされ，大変活気に満ちた雰囲気の間となった。審査

員は歯系大学院所属の全教授があたり，発表内容の学術性，獨創性，計画性，プレゼン技術等について厳密な審査が行われた。

全発表終了後に選ばれた成績上位5名の表彰者とそれぞれの発表内容を下表に示した（敬称略）。5名の表彰者には，それぞれ60，50，40，30，20万円の研究助成金，賞状，記念品などが授与された。また，成績6位から15位の発表者に15万円，16位から25位の発表者に8万円が，それぞれ助成金として贈られた。

順位	氏名	所属	研究	学年	研究内容
1	稲田 絵美	小児歯科	同左	博3	顎顔面領域の形態と機能の三次元統合に関する研究
2	山下 大輔	歯周病学	歯科理工	博4	生体適合性高強度セラミックス複合体インプラントの開発
3	武元 嘉彦	小児歯科	同左	博2	捕食動作における手と顎顔面部の協調運動の三次元解析
4	岡本 敦子	歯科矯正	口腔生化	博4	歯周炎モデルマウスにおける矯正的歯の移動速度の減弱
5	Andréia de Toledo	予防歯科	同左	博1	<i>S. oralis</i> のヒト動脈内皮細胞への侵入および炎症反応誘導におけるRPSの役割について



また，25の演題のうち，6演題は英語による発表が行われ，歯系大学院生における国際意識の高さを示すものになった。6演題のうち，英語プレゼン技術の最優秀者への特別賞として，田中千絵先生（口腔顎顔面学，博4）に別途10万円が研究助成金として贈られた。発表会終了後に，キャンパス内の大学生協食堂で，懇親会が行われ，立食形式で，講座枠を超えた楽しい親睦が図られた。

本研究会は，科研費等の応募資格のない有望な若手研究者を助成する有意義な企画であったと同時に，歯系大学院の各講座の研究内容について，学部生，研修医などを含めた一般の周知を高める良い機会にもなっ



た。この研究発表会は来年以降も毎年開催される予定であり、将来的に、歯系大学院への進学希望者数の増加、歯系大学院研究レベルの向上と国際化、各講座間での共同研究の活性化などに繋がっていくことが強く期待される。

各研究班報告

口腔環境制御研究プログラム班（報告者：小松澤均）

本研究班は、心身歯科学分野，歯科放射線学分野，歯科麻酔全身管理学分野，歯科保存学分野，予防歯科学分野，口腔微生物学分野の6分野で構成されている。各分野への予算については、基礎配分の他に、担当する大学院生数と前年度の英語論文数の割合をもとに配分した。他大学との連携としては、8月1日に長崎大学で「口腔からQOL向上を目指す連携研究事業」の「口腔環境制御研究」でのカテゴリー集會が開催され、本学の研究体制・研究内容などについて発表し、今後の他大学との連携研究等について議論した。

摂食・嚥下機構研究プログラム班（報告者：山崎要一）

本研究班は、歯科機能形態学，口腔顎顔面補綴学，顎顔面外科学，口腔生理学，歯科矯正学および小児歯科学の6分野で構成されている。各分野への予算については、基礎配分の他に、担当する大学院生数と前年度の英語論文数の割合をもとに配分した。今年度の「先端歯学スクール2008」の発表は、小児歯科学分野所属の大学院生が担当した。また、11月29日に徳島大学で開催予定の「口腔からQOL向上を目指す連携研究事業」の「咀嚼・嚥下」研究発表会では、Web上で研究紹介ポスターを発表した。

再生工学研究プログラム班（報告者：野口和行）

本研究班は、歯科応用薬理学，人体構造解剖学，顎顔面疾患制御学，口腔病理解析学，咬合機能補綴学，歯科生体材料学，口腔分子生物学および歯周病学の8分野で構成されている。本年度は各分野へ均等配分にて予算配分を行い、研究を行っている。他大学の連携として、9月に広島大学にて口腔からQOL向上を目指す連携研究事業の「再生工学研究」の研究集會が開催されたが、本学からは都合により演題は申し込まなかった。